

平城宮北方遺跡の調査

—第548次

1 はじめに

住宅建設にともなう事前の発掘調査である。調査地は平城宮北方遺跡にあたり、平城宮第一次大極殿の北方に位置する。南北3.8m、東西24mの計91.2㎡の調査区を設定し、調査区南端にて、後述のように掘立柱の柱穴を検出したため、柱筋の位置2ヵ所で南北3m、東西1m分を拡張した。調査面積は合計約98㎡。調査期間は2015年4月15日から22日までである。

2 基本層序

現地表はほぼ平坦である。層序は、地表から表土約10cm、耕作土約20cm、地山（橙白色粘土、礫を多く含む）で、遺構検出は地山面でおこなった。地山は東方に向けて、緩やかに下がる。

3 検出遺構

主な検出遺構は、斜行溝1条SD351（調査区東方）、掘立柱建物SB350である。

SB350は調査区の南端および南方拡張区にて検出した掘立柱建物で、柱穴6基を確認した。東西方向に4基の柱穴が並び、西方ではさらに南方に2基の柱穴が並ぶ。柱間は約2.4m（8尺）等間、柱掘方は一辺約70cmの隅丸方形で、断割調査によって確認した遺存する柱穴の深さは約20cm。顕著な出土遺物はないが、奈良時代の瓦が含まれ、奈良時代の建物と考えられる。

今回検出した掘立柱の柱穴列は、北妻柱列にあたり、もっとも西側の柱列は廂柱列にあたると考えられる。これより、SB350は南北棟で、梁行2間、桁行2間以上の身舎の西面に廂の取り付く片廂の建物に復元される。

（海野 聡）

4 出土遺物

出土遺物は調査面積に比して少ない。

奈良時代の土師器・須恵器片が少量と、中世から近世にかけての土師器・瓦器・瓦質土器が出土した。

（小田裕樹）

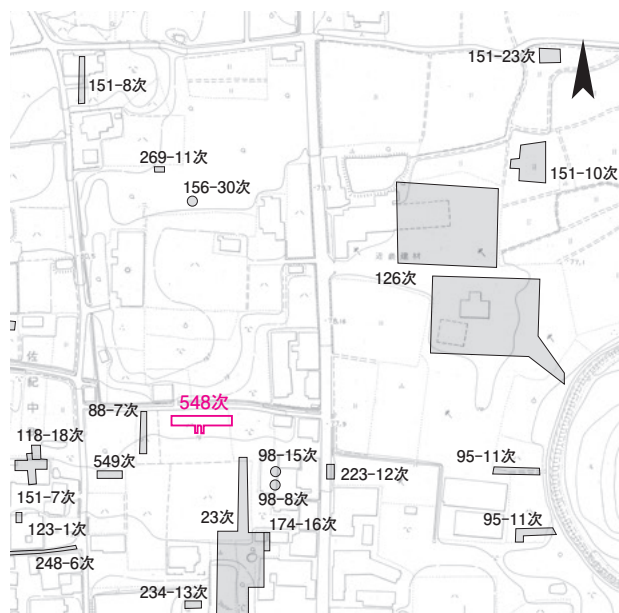


図200 第548次調査区位置図 1 : 3000



図201 調査区全景（東から）

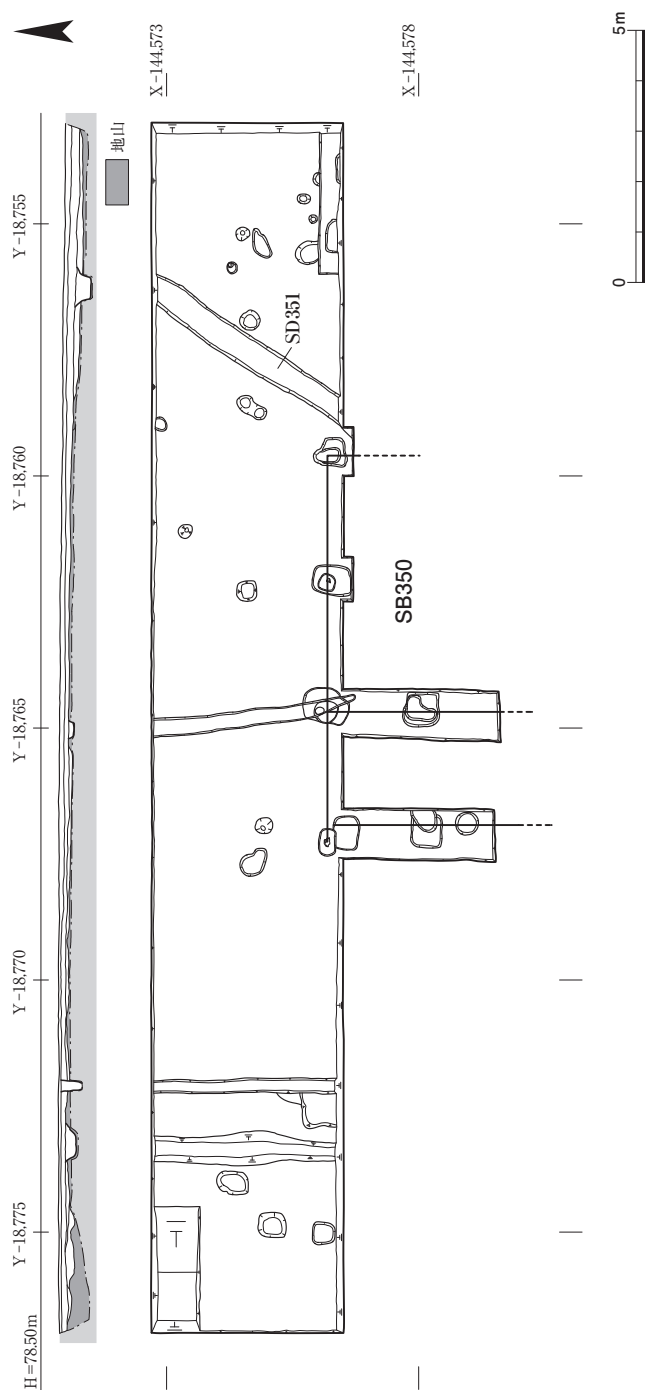


図202 第548次調査区遺構平面図・土層図 1:150

瓦磚類では、切罫斗瓦の小片1点、丸瓦1点(0.057kg)、平瓦62点(4.289kg)が出土した。(石田由紀子)

5 まとめ

今回検出したSB350は、廂付掘立柱建物で、平城宮北方の様相を考えるうえで、重要な知見である。今後の周辺の調査に期待したい。(海野)



図203 SB350検出状況(北東から)



図204 SB350廂柱筋柱穴(拡張区)検出状況(北から)



図205 SB350柱穴断割(北から)